Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-05

言葉遊びから生じる発話の力 : 洒落が駄洒落となる場合の文法的及び語用論的条件

小松原, 哲太

(Citation)
日本語用論学会大会発表論文集,8:81-88

(Issue Date)
2013-11-03

(Resource Type)
conference paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008849

言葉遊びから生じる発話の力
―洒落が駄洒落となる場合の文法的及び語用論的条件―

小松原哲太
京都大学大学院／日本学術振興会
komatsubara@hi.h.kyoto-u.ac.jp

<Abstract>
The purpose of this research is to show how people interpret and evaluate puns from the viewpoint of Cognitive Linguistics. My analysis indicates that an ineffective pun has three characteristics. First, it directs the attention of the listener on the speaker's intention for making a pun, whereas an effective pun allows the listener to notice the speaker's intention indirectly. Second, an ineffective pun focuses on sound similarity, whereas an effective pun takes advantage of sound similarity to create ambiguity. Third, although some ambiguity is necessary when making a pun, an ineffective pun focuses too much attention on its ambiguity.

【キーワード】: 洒落、修辞性の評価、慣習的含意、発話の力

1.　はじめに

最も広い意味で捉えるならば、言葉遊び (wordplay) とは意味伝達を目的としない遊戯的表現であるといえる。本稿では、言葉遊びの一つである洒落 (pun) を分析対象とし、洒落の修辞的機能及び認知的メカニズムの一部を明らかにすることを目的とする。

言語表現の修辞的機能の分析に関するコミュニケーション論的観点からは、洒落の現象は、言語主体の評価を介して、言語使用の場にポジティヴあるいはネガティヴな効果を生じるという点で、言語の対人的機能に関わる修辞的現象であるとみることが可能である。本稿では、文法と修辞に関わる語用論的言語現象を認知能力の観点から考察していく認知語用論の立場（山梨 2009: 61-62）から、洒落の修辞性に関する言語分析を行っていく。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では、広義の洒落の定義を述べた後に、駄洒落の現象に着目して、洒落の評価性という問題を提示する。第 3 節では、発話行為と含意の観点から駄洒落の分析を行い、典型的な駄洒落の具体事例とともに、洒落が駄洒落となる場合の語用論的条件を示す。第 4 節では、本稿の分析の要点と展望を述べる。

2.　洒落と駄洒落

最も広い意味で規定するならば、洒落とは、類音性を利用して意味にあいまい性をもたせる修辞であると言える[1]。洒落表現一般がこの種のスキーマ的な共通性をもつ一方で、

個々の洒落の具体事例には、修辞性の点で差異がみられる。すなわち、洒落には技巧的で賞賛を生む事例もあれば、安易で軽蔑を生む事例もある。ここでは、後者のタイプの事例を"駄"洒落として、一般の洒落から区別することにしたい。

経験から分かるとおり、洒落にはよいものと悪いものとがある。その究極的評価基準は状況や個人の心理に帰せられると考えられる一方で、駄洒落にはいくつかの文法的及び語用論的特徴が観察される。

(1) a. その日は朝はやくからゴール前の桟敷（さじき）にでんと腰をすえ、魔法びんにつめたスコッチウィスキーを、すこっちずつやりながら、ボートが見えてくるのを待っていた。

（井上ひさし「ブンとフン」: 36）

b. 魔法びんにつめたスコッチウィスキーを、すこしずつやりながら、ボートが見えてくるのを待っていた。

(1a) では、「スコッチウィスキー」と「すこっちずつ」とが掛けられて、しばしば"駄"洒落とみなされる。ここで注意すべきは「すこっちずつ」という語が日本語の語彙に存在せず、「少しずつ」のもじり[2]として用いられているという点である。(1b) との比較から明らかであるように、ここでの駄洒落という評価はもじりという形態論的逸脱性が直接の要因となっており、ある人の主観的評価というよりも、言語表現に内在する構造的特徴が問題となると考えられる。本稿では、洒落の具体事例の記述分析を通して、洒落の評価性の言語的メカニズムに関する考察を行っていく。

3. 駄洒落の認知語用論的基盤

洒落の生む効果は多様である。本節では、典型機な駄洒落とみなされる事例を取り上げて、洒落の修辞的あるいは語用論的機能のメカニズムに関する分析を行う。3.1 節では、慣習的含意との関連で、駄洒落の語用論的分析を行い、3.2 節では、発話行為論の観点から、駄洒落の発話行為論的側面について考察を行う。3.3 節では、駄洒落の語用論的条件の認知的基盤に関する考察を行う。

3.1. 洒落の含意

ある発話から洒落の含意をくみ取る場合、簡単に洒落が理解できる場合もあれば、洒落かそうでないかを判断するのは難しい場合もある。本節では、ある洒落の含意が、会話の含意であるか、慣習的含意であるかが洒落の評価性に関わることを示す。

一般に、会話の含意と慣習的含意とは、主に分離不可能性とキャンセル可能性に関して異なる性質をもつ[3]。会話の含意 (conversational implicature) は、分離不可能かつキャンセル可能である (Grice 1975: 57-58) のに対し、慣習的含意 (conventional implicature) は、

分離可能かつキャンセル不可能である (Levinson 1983: 128)。

ある含意が分離不可能 (non-detachable) であるとは、ある言語表現の含意が特別な語彙や文法形式に結びついておらず、命題的意味を変えないパラフレーズを行っても含意が残留することをいう。(1a) と (1b) の比較によって、(1a) が洒落であるという含意はもじりという語形変形に結びついていることが分かる。よって、この種の含意は分離可能である。

ある含意がキャンセル可能 (cancellable) であるとは、ある表現の含意がコンテクストを付け加えることによって無効化され得ることをいう。以下の事例では、洒落でない旨を明言することによって、洒落の含意がキャンセル可能である。

(2)　a. つまり人間がすべてに疲労し尽くしたときヒーローがあらわれるのだ。
　　b. つまり人間がすべてに疲労し尽くしたときヒーローがあらわれるのだ。
　　「ヒロー」と「ヒーロー」とで語呂合わせをしているわけでは決してない(…)。

（井上ひさし「あとがきにかえて」: 235）

これに対して、もじりを含む事例では、キャンセル不可能である。

(3)　? その日は朝はやくから、魔法びんにつめたスコッチウィスキーを、すこっちずつやっていた…とこれは洒落を言っているのではない。

以上から、(1a) のようなもじりを含む典型的な駄洒落表現から生じる洒落の含意は、分離可能かつキャンセル不可能であり、慣習的含意としての性質を満たすことが分かる。

会話の含意は、語用論的な状況への依存性と、解釈者の推論の多様性によって特徴づけられる。(2a) のタイプの言葉遊びが洒落であるという含意は、会話の含意として生じている。言い換えるならば、この種の類音性が洒落とみなされるか否かは解釈者の判断に任されている。これに対して、慣習的含意は、語用論的な状況から相対的に自律的であり、解釈者の推論の可能性は非常に限定されたものとなる。(1a) が洒落であるという含意は、もじりという言語形式に強く結びつけられており、逆に言えば、この種の言語形式は解釈者に洒落の含意を強制する標識となっているといえる。

3.2.　駄洒落の条件

洒落は、文の陳述的意味をもつだけでなく、その文が洒落であるという含意を伴う。そして、洒落であるという含意は、言語の対人的機能に関わる何らかの効果 (effect) を生む[4]。発話行為論の観点からは、この効果を洒落の力 (force) とよぶことも可能である。Austin (1962: 98-107) は、発話行為に伴ってはたらく語用論的な効果に関して、発語内的な効果と発語媒介的な効果とを区別している。

ある発話行為が発語内的 (illocutionary) であるとは、ある言語表現を述べること自体において (*in* saying something) 行為が遂行されて、語用論的な力が生じることを言う（e.g. I order you to leave. における命令の力）。(1a) では、言語形式自体の中に洒落の意図がもじりによって明示的に表現されている。したがって、この場合、洒落の力は発語内的に遂行されると言える。これに対して、ある発話行為が発語媒介的 (perlocutionary) であるとは、ある言語表現を述べることによって (*by* saying something) 、その効果として解釈者が発話者の意図を認めることをいう（e.g. There is a snake behind you. による警告の力）。(2a) では、洒落であるか否かは解釈者の推論に任されている。言い換えるならば、洒落の力は発語媒介的に遂行されると言える[5]。

(2a) が巧みであるか否かは別として、(1a) のようなもじりを含む洒落は駄洒落とみなされる傾向にある。この点からは、発話行為から生じる力が直接的であることと、洒落が駄洒落とみなされることには相関があると思われる。本稿では以下の条件 (P) を、洒落が駄洒落となる場合の一般的条件であると仮定する。

(P)　洒落の力が発語内的に遂行される場合、洒落は駄洒落とみなされる。

3.3.　駄洒落の条件の三つの側面

駄洒落の条件 (P) は発話の力に関わる語用論的条件である。では、駄洒落の条件 (P) はどのような言語的特徴をもち、またどのような認知的動機づけをもつのであろうか。本節では、駄洒落の条件 (P) の認知言語学的基盤に関する考察を行う。

まず、発話者の意図と解釈者の認知の観点からみた場合、発語内的な力の性質から、駄洒落の条件 (P) は次の認知的側面をもつものとして言い換えることができる。

(P-1)　洒落の意図が前景化された場合、洒落は駄洒落となる。

次の事例では、駄洒落の条件 (P-1) が修辞性の評価と関連する。

(4)　佐藤は大学時代はラグビー部の副将格でフロント・ロー、スクラムを組み相手を押してばかりいたせいか押しが強い。

（井上ひさし『吉里吉里人』: 13）

(4) では、物理的に相手を押すことと「押しが強い」という慣用表現とのあいまい性が利用されて洒落となっている。ここで注意すべきは、物理的に人を押すことは、交渉によって押しが強くなることの論理的原因にはなりえないことである。よって「せいか」という因果関係をあらわす接続表現を矛盾無く意味解釈するためには、同音性によって二語が結ばれているということ、すなわちこれが洒落であるということを前景化する必要があり、

これによって駄洒落の条件 (P-1) が満たされることになる。

次に、記号論の観点からみた場合、駄洒落の条件 (P) は音と意味の両側面から捉えていくことが可能である。典型的な駄洒落である (1a) は、図 1 のような認知文法論的分析が可能である[6]。

音韻空間 (phonological space) においては、「スコッチウィスキー」と「すこっちずつ」のそれぞれの語頭に対応関係が認知される。ふつう語の全体が前景化されるとき、音節レベルの単位は相対的に背景化されるが、ここでは音節レベルの単位が音反復によって際立ち、二つの言語レベルの活性化の度合いは均衡する。ここで、適切な意味解釈のために、非コード語彙「すこっちずつ」の音韻形式から文法的語彙「少しずつ」の音韻形式を推論するプロセスが生じる。参照点 R からターゲット T への参照点関係 (Langacker 1993) は、この種の推論プロセスをあらわす。一方、意味空間 (semantic space) においては、この推論のターゲットから「少しずつ」の意味極が誘引されて言語理解のベースとなるが、「少しずつ」は実際には表現されていないため、その意味極はプロファイルされていない。

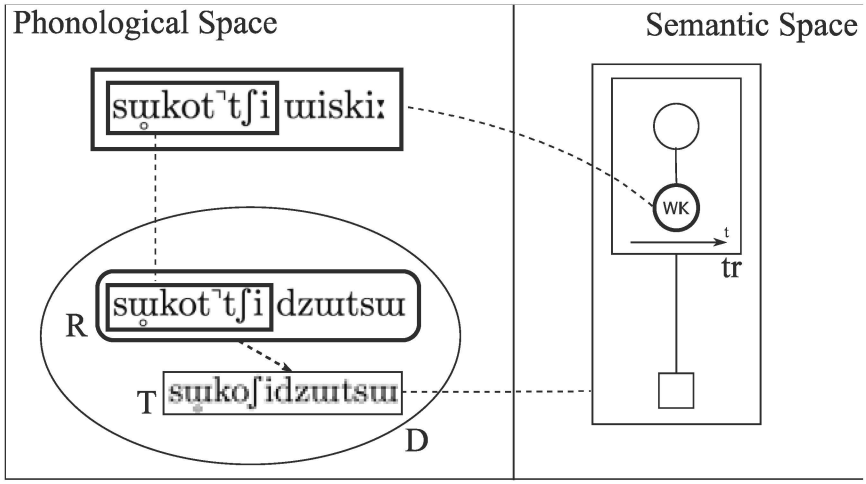

図１：もじりを含む洒落

図１から分かるように、太線で示された際立ちの高い要素は音韻空間に集中している。この種の表現では音韻形式の対応関係が強調されており、洒落の音韻的側面である類音性が前景化されているといえる。このことから、駄洒落の条件 (P) は、次の音韻論的側面をもつものと考えられる。

(P-2)　洒落の類音性が前景化された場合、洒落は駄洒落とみなされる。

次の事例では、駄洒落の条件 (P-2) が修辞性の評価と関連する。

(5) 静岡市でしたので、お土産はチーズお菓子にしました。

(5) では、「静岡市」と「チーズお菓子」に関して摩擦音と破擦音の対立、短母音と長母音の対立が明確に認知される。基本的に、洒落には高い類音性が要求されることから、似ていない二つの言葉を洒落として関連づけること (鈴木 1959: 900) は、類音性を前景化するという駄洒落の条件 (P-2) を満たすことになる。

また、洒落の類音性は意味にあいまい性をもたせる。(1a) では、本来「スコッチウイスキー」と「少しずつ」という二つの語句は、品詞も違えば意味内容も無関係であり、意味のあいまい性はまず無いものとみられる。しかし、ここではもじりによって強引に類音性が形成されることにより、本来存在しなかったところに意味のあいまい性が生じている。言い換えるならば、洒落の意味的側面であるあいまい性を不当に前景化するものであるといえる。このことから、駄洒落の条件 (P) は次の意味論的側面をもつものと考えられる。

(P-3) 洒落のあいまい性が前景化された場合、洒落は駄洒落とみなされる。

次の事例では、駄洒落の条件 (P-3) が修辞性の評価と関連する。

(6) 渓流釣に出かけてくるとは言ったものの釣果はなし、<u>岩魚買った</u>とは<u>言わなかった</u>、いや言えなかった。

(6) では、「岩魚買った」は目的語をとる動詞句と解釈されるが、これを NP + VP =VP と異分析することにより、統語論的あいまい性が生じている。この種の異分析は、本来存在しないあいまい性を強引に形成するという点で、洒落のあいまい性を強調するものであるといえ、駄洒落の条件 (P-3) が満たされると考えられる。

4. おわりに

本稿では、洒落の評価という問題をめぐって、典型的な駄洒落に関する認知語用論的分析を行うことにより、洒落の評価性が発話行為論的な遂行性によって特徴づけられ得ることを示した。また、駄洒落の発話行為論的な条件が、どのような言語的特徴によって満たされ得るかに関して、具体事例とともに記述分析を行った。

本稿では、主に駄洒落をめぐる考察を中心に行ったが、"駄"洒落の分析を行うことは、"巧い"洒落に関する考察を間接的に行うことでもある。本稿の分析結果から、巧みな洒落の特徴に関して、以下の二点が示唆される。第一に、3.1 節において、典型的な駄洒落では、洒落の含意が慣習的含意として理解されることを示した。このことから逆に、巧みな洒落の含意は、会話の含意として理解されることが示唆される。巧みな洒落においては、含意をくみ取るか否かは解釈者の判断に任され、文字通りの解釈とあいまいである。言い換えるならば、巧みな洒落は発語媒介的に理解されるという特徴をもつと考えられる。第二に、

3.2 節において、自明なあいまい性をことさら強調すること、あるいは類音性を変形、もじりによって偽造することは駄洒落につながることを示した。このことから、巧みな洒落とは、言語の中に自然に備わっている類音性又はあいまい性を利用するものであることが示唆される。九鬼周造は、文学における洒落の問題に関して、文学は「音韻上の偶然の一致」を活かすものであるという（九鬼 1980[1933]: 100）。本稿で挙げた具体事例からも示唆されるように、洒落が巧みであることと、洒落が文学的に昇華されることとは無関係でないように思われる。この点からは、類音性・あいまい性の自然さは、洒落の文学性あるいは美的性質とも関連するものであると考えられる。

注

1. この意味では、洒落という用語を、秀句・地口・もじり・かすり・口合・むだ口・無理問答・掛詞等を包括するものとして扱うことが可能である（鈴木 1959, 1979, 尼ヶ崎 1988, 中村 1991, 山口 2009）。
2. もじりとは"捩り"であり、元の語を変形して洒落に用いることをいう。
3. 会話の含意と慣習的含意は他にも、計算可能性、慣習性、含意の決定性、普遍性に関しても対照的な性質をもつ (Levinson 1983: 127-128)。
4. 洒落であるという含意から生じる修辞的あるいは対人的効果は多様である。洒落は、ユーモアに関わる修辞的効果を生む場合もあれば、場を"凍らせる"場合もある。大して面白くもない洒落から、会話の場が和むこともあり得る。
5. オースティンは、発語内的行為の効果は言語の慣習的 (conventional) 性質によってもたらされるものであり、発語媒介的行為の効果はこれに対して非慣習的であると述べている (Austin 1962: 103)。この点では、発語内的行為と発語媒介的行為の区別は、慣習的含意と会話の含意の区別と並行するものであると言える。
6. 音韻空間、意味空間については Langacker (1987: 76-81) を参照。

引用例出典

井上 ひさし. 1974a. 「あとがきにかえて」、『モッキンポット師の後始末』232-235、東京: 新潮社.

井上 ひさし. 1974b. 『ブンとフン』東京: 新潮社.

井上 ひさし. 1981. 『吉里吉里人』東京: 新潮社.

参照文献

尼ヶ崎 彬. 1988. 『日本のレトリック—演技する言葉』東京: 筑摩書房.

Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. London: Oxford University Press.

Grice, H. Pall. 1975[1967]. "Logic and Conversation." In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.

九鬼 周造. 1980[1933]. 「文学概論」『九鬼周造全集第 11 巻』、1-186、東京: 岩波書店.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4: 1, 1-38.

Levinson, Stephan C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

中村 明. 1991. 『日本語レトリックの体系―文体のなかにある表現技法のひろがり―』東京: 岩波書店.

鈴木 棠三（編）1959. 『ことば遊び辞典』東京: 東京堂出版.

鈴木 棠三. 1979. 『日本語のしゃれ』東京: 講談社.

山口 政信. 2009. 「創作ことわざ―模倣と創造のことば遊び」、『国文学解釈と鑑賞』、74: 12、139-145.

山梨 正明. 2009. 「認知語用論からみた文法・論理・レトリック」、『語用論研究』、11、61-97.